

リアスの国からII

(301)

大船渡市 富谷 英雄

詩のあそび「わくわくな言葉たち」―大船渡の声（日本現代詩歌文学館・埼玉大学新井高子研究室企画）が、私が住む盛町の沢川仮設住宅談話室で開かれた。講師は埼玉大学日本語教育センター准教授の新井高子さん。

新井さんは群馬県桐生市生まれの詩人。詩集『タマシイ・ダンス』（未知谷刊、2007年）で小熊秀雄賞を受賞している。新井さんは新沼謙治の

るのではないか。ここには『湘南ボーイ（加山）vs 気仙ボーイ（新沼）』の構図があるのではないかと自説を紹介すると、会場では、私をはじめ、参加者のほとんどが頷いた。それだけ説得力のある分析だった。

啄木短歌を大船渡弁に

った阿久悠。「細部まで行き届いたことばがあれほこそ、ヒットしたのだと感じた」と新井さんは分析。

新井さんはさらに「この詩は『お嫁において』（作詞・岩谷時子、歌・加山雄三）を踏まえてい

品集が、このほど談話室に届いた。その作品の一部を紹介したい。

「友がみなわれよりえらく見ゆる日よ／花を買ひ来て／妻としたりしむ」に對して大船渡弁訳は「友だちがおらよりえらく見える日に／花っこ買って来て／ががあととはなしっこ」。

また「かなしきは／かの白玉のごとくなる腕に残せし／キスの痕かな」に對して大船渡弁訳は「せづねえのは／あの白い玉みだいな腕（きゃあな）さ残した／チュウウの痕だべ」だった。

いやはや、参加者たちの発想はすごかった。